

---

# **ギャルゲ好きの何が悪い**

コクヨウ君

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ギャルゲ好きの何が悪い

### 【NNコード】

N6097X

### 【作者名】

コクヨウ君

### 【あらすじ】

特に強くはない、そして人をキャラとしか見ていない、さらには弱虫なのに傲慢且つ外道、そんな主人公、カルマがいろんな勘違いをされつつもキャラを落としたり、コネで生き延びていく物語

## 一話目 転生フラグ

俺は今日、人生最大の過ちを犯してしまった。

いくら悔やんでも、悔やみきれない程の、大きな、大きな間違い  
だった。

もし、あの時

俺があいつを家までおくれてやれば。

もし、あの時

俺があいつを突き放さなければ。

もし、あの時

俺が、あいつに少しでも、優しくしなければ……。

あいつは、

そんな後悔も虚しく。

獵奇的に殺害されたあいつの姿が、赤く、黒く染まる。

「な、んで、何でだよつ！？」

やり切れなさから、俺は手にあるものをベシトに投げ付けた。

その投げ付けられたものには赤く  
『→ Bad End 8→』  
の文字が。

俺の手にあるもの…………それは一週間ほど前に発売したばかりの  
エロゲだった。

「チクショウ！ なんでサブモードがでないんだよ！？」  
ヒーラー13周目なのに！

全49End

その他サブEnd12のオートセーブ式ゲーム。

エロゲ曰みる 新友とのおもも達曰まで 色々な一コースに  
応え多種多様なEndがある。

そして、発売一週間にして、今だクリアした人はいない。

「チクショウ、チクショウ、あそこでルートがかわったのか  
ブツブツ…。」

綿密にプレイした4時間をかえせ……

暫くブツブツと文句を言つていると、ぐつと腹が鳴る。

「……はあ……氣分転換にコンビニでも行こつかな……？」

……この言葉こそが、俺の人生最大の過ち。

コンビニに行きトラックに轢かれて転生フラグだった。

で、俺は死んだ、なのに何故か白い空間にいて、神様がいて“お前には転生してもらう”と？

「そうだ……」

どうやら神様は本当に心が読めるらしい。

ねえ神様

何で俺が死んだんだ？なんていう陳腐な質問していいかな、俺が知ってるパターンだと？神様の間違いでうつかり？神様の部下の間

違いでうつかり？運命とやらだつた？俺がかつてに死んだ、なんだ  
けど？

「？、私が故意に連れて来ただ」

ふうん…あたらしい選たく肢だね。

「お前には、異世界に転生してもいいわ」

へえ異世界かあ、まん画の世かいかな？アニメのせかいかな？小説  
の世界かな？

俺のまったく知らない世界？へい行せかい？鏡のなかのせかい？  
俺は人げんになるのかな？動物かな？しょく物かな？びせい物かな？  
むき物かな？

「お前の世界では漫画になつていた世界だ…残念だが、特典は最  
低限のお前の望みを叶えるだけだ、補正も何もない  
使命も理由も意義もなく、お前を転生させる」

いいよ、にじげんなんてもえるじゃないか。

それに、やいていげんだってねがいはかなうんでしょ？

ああ…なんだかここのことあとまがボーッヒする。  
つまく考えがまとまらなくなつてきた。

「そりが、まあ精々楽しんでくれ」

うん、せいいっぱい楽しませてもうつよ。  
こんなきかいはこのさきないだるうしね。

「ああ、じゃあな

そのじとせがれいじるび、おれのめのまえがまつこになつてしまつた。

まあ、わとからしゆこのじとせになんてへんなはなしなんだけど。

しりくなつたせいでかみれまもみえなくなつて、そしておれはなにもみえなくなつてめのまえはしるだけで、なにもきくえなくなつてどんどんあたまがぼーつとしてきて

こんなふうにかんがえじとをしているといふがらがつてきてしかもなんだかねむくなつてきたおれはやれにせからえないし

ねやすみ



―― 話題 いんじりはオタ充、そしてさらばオタ充（前書き）

基本的に勢いのみで書いてます

誤字、脱字、矛盾点の指摘

アドバイスなどしてくれるとありがたいです

## 一話目 いんじちはオタ充、そしてさらばだオタ充

カルマ＝ラクジエンドは平々凡々な人生を謳歌していた。

中肉中背の、決して醜くはない凡庸な顔立ち。

勉強もそれなりに出来、それと同様に運動もそれなりに出来た。

が、あくまでも普通に生きてきた彼は13才の頃、変革を迎えることとなつた。

「今日ぞ、一緒にゲームとかしねえ？」

それなりに仲の良かつた友人からの軽いお誘い。  
しかし、これを機会に彼の新たな人生が始まった。

簡単に言つと、彼はゲームにハマつたのだ。  
それはもう、何かにとり憑かれたかのように。

青春を全てゲームに捧げ、気がつけば彼は23になつていた。

せめてもの救いが、彼の容姿が彼のお気に入りである某ギャルゲーの主人公に似て、実年齢よりも幼く見え、且つ身嗜みだけはしつか

りとしていたことだけであった。

だが、実は彼の人生は、彼の知らない所で危険に満ちていた。  
それは彼の人生の転機から6年後のことだった。

彼は、公式ギャルゲサイトの交流所で顔写真をさらした。  
最初は合成だ、整形だ、と騒がれ、次にモデルになつた人物など  
と騒がれた。

尤も暫くすれば、そんなこともある、と落ち着いたが。

そのゲームの中で、一定の条件を満たすと、主人公の女装シーン  
ができるという物があつた。そしてそれ故に、彼に興味をもつたコ  
アなファン達がいた。

彼はその人達と仲良くなつた、彼等も、全くの下心もないとは言  
えないが、彼を友人だと思えていただろう。

彼等の中でも最も年齢が低く、最も仲が良い少年とは、オンライン  
ゲームをやってみたりもしていた。きっと少年も、純粹に彼のこと  
を友人だと思っているだろう。

普通

これだけならば、彼の人生に危険があるだなんて思えない。  
精々、架空請求程度の危険だ。

その少年の名前が

ミルキ・ゾルディック

でさえなければ。

何故？ と、彼は思うだらう。

彼は今日、オフ会というものに初めて参加しようとしていた。  
参加人数はそれ程多くはなく、5人程、内2人は彼の顔をさらし  
た時からの、4年程の付き合いだった。

集合場所はザバン市の、とある町の噴水。 集まっていたのは3  
人、来なかつたのは彼と仲が良い少年だった。  
事前の連絡もなく、俗に言うドタキャンであつたため、少しばか  
りの心配をしつつも初めてのオフ会を楽しんでいた。

自分の好きなゲームについて語り合い、自分の趣味を否定されな  
い生身の人間に会え、ホクホクとした気持ちで彼は帰りのバスに乗  
ついていた。

彼は油断していた、尤も、彼は一般人であり、気を張り詰めるこ  
となど殆どないに等しく、些か間違つた表現である氣もするが。

彼は油断していたのだ。

まさか、そのバスに大量殺人犯が乗っているだなんて、思わずには。

バスには彼含め7名程が乗っていた。

黒髪にしらがが目立ってきた無愛想な運転手、一番後ろの席を陣どる垂れ眉の髪をはやした男性、一緒のバス停で乗った彼の隣の席にいる十代の子供、イチャイチャしている後ろのほうに座っている男女、男女の一いつ程前の席に座る初老の女性。

皆が皆、その場にいる者に興味がないわけではないのだ。

「きやあああああ！」

突然上がった悲鳴に、彼は後ろを振り返る。

そこには、赤く染まったモノがあった。グチャグチャと音を出してバラバラにされるのは、先程悲鳴を上げた女。

初老の女性はこれでもかと目を見開き、小刻みに震えている。外を見ると、何時の間にかバスは止まっており、走って逃げる運転手の姿が見えた。

「あ……つうつ……」

噎せ返る程の、血の臭い。

初老の女性や、隣の席の子供のことなんか考えずに、泣きながら出口へ向かつ。

「はあつ……う……うう」

走つて、走つて、何度も躊躇、ひたすらに逃げる。  
相手は歩いている筈なのに、距離は狭まる一方だった。

「……っ！」

目の前には垂れ眉の、手が血に染まった男性。  
不意に思い出す。

被害者は100人ほど、ザバン市に住む方は十分にお気をつけてください。

ニュースレポーターの言つていた、最近よく聞く報道。が、それ以外にも、何かが頭によぎる。

解体屋ジョネス

試験官

大量殺人犯

ハンターハンター

「うう……うああああ！！」

唐突に、何か大切なことを、少しだけ、思い出した。  
俺は……

「一次元のキャラを攻略するまで死ねない！」

何か、重さのない服を着た感覚がある。

纏をすれば、威圧感を『えられるかも

纏？俺はそんなの知らない

「……！」

訳がわからないまま、生きたいといつ思いを、すべて、ソレにそそぐ。

ジヨネスは、悪態をつき、顔を歪め、立ち去った。

ソレをするだけ、ただそれだけで、俺の今世最大の危機が去った。

「は、はは、はははは！…………うあ…………ええ……」

乾いた笑いと安心感、そして先程のバスの中の光景が目の前にうかぶ。

「うえつ……くう……」

纏とやらはいつの間にか解けていた、俺は泣きながら嘔吐し、地面にはじつづばる。

「ふうん、一瞬、殺すのかと思った…」

不意に聞こえてきた声。

そちらに顔をむけると、バスにいた、あの少年がいた。

「うん、これならまあいいかな、駄目なら今度殺そひ

少年の声は耳に入らないが、少年の顔には何故か見覚えがあった。黒髪黒眼、猫のような顔立ち、無表情、幼いながらもあの顔立ちは

ゾルディック。

何故? なんでこんな所に? どうしてだ?

頭がまわらない、痛い、頭が痛い、ゾルディックってなに? なんなの?

「? 弱い? どうしよう、やっぱり今殺そうかな?」

「テントと頭を横に傾げる少年。  
殺す? 誰を?」

「……ねえ」

「ひつ……はい……」

話かけられる、頭には既に恐怖しかない。

「今死にたい?」

「……は……?」

わからない、何故俺に聞く、いや、俺は助かるのか?

俺からの返答にかた眉を少しあげ、ゆっくりと少年は近づいてくる。

「ひいっ！ …し、死にたくないです！」

子供相手に、恥も見榮えも了見もなく、命乞いをする。

「…なら、いいや、精々強くなつてね

少年は、何事もなかつたかのよひ、一度も振り返りはずにて去つて行く。

俺は、暫く氣絶し、田覚めるとふらふらしながら帰路についた。

――話題―― こんなのはオタ充、そしてさらばだオタ充（後書き）

イルミとジニアネス（以前だけのミルキ）の登場  
ご都合主義ですから、なるべく原作キャラに合わせたかってんですよ

ジョネスは運悪く

イルミはミルキが友達に会いに行くと言つ出したりで、殺しに、み  
たいな感じです

## 二話題 せんせー、念能力は最低限にはありますかー？（前書き）

念能力を身につけます

今更ですが

友情、努力がないのに勝利を掴むのは嫌だ！と思う人は見ないほう  
がいいですね

## 二話目 せんせー、念能力は最低限にはありますかー？

夢を見ている。

日本という豊かで安全な国に住み、怠惰の限りを尽くし、トヲックに繰かれ、神様に会つ夢。

これは、俺の記憶。

前世で死に、使命も理由も意義なく、転生した俺の記憶。

そして次に見たのは、バスでの出来事。

……もひ、怖くも何ともないな。

だって、此処は漫画の世界だ、そして俺は、その世界で暮らす一人だった、だから怖かつたんだ。

自分の世界が偽物だなんて、知らなかつたからさ。

きっと今の俺なら、人だつて戸惑いなく殺せるだろう。

此処は、漫画の世界、二次元の世界、偽物の世界。

この世界の人は、人ではない、この世界で俺だけが人なんだ、俺だけが…。

夢の中、ゆづくりと、ゆづくりと、心を、俺自身を、騙していく。そうしないと、俺は、きっとすぐに死んでしまうから。

全てを人としてではなく、キャラクターとして。

キャラクターとして、自分の、唯一の人間である俺の、思い通りに。

俺自身でさえも、思い通りに動かせるよ！」。

無茶でも、無謀でも、無鉄砲でもいい、そんな、能力を、俺の力を

二次元を、手にする、唯一の、人間に、俺は、なりたいんだ。

フラグクラッシュヤー

落とし神の憂鬱

セーブポイント

憂鬱な日記

田覚めると、俺は発が使えるようになつていた。

そして、神様の「最低限」は信用できないということを学んだ。

三話目 せんせー、念能力は最低限にはいつますかー？（後書き）

「纏を知り、絶を覚え、練を経て、発に至る…。」

「発はなんか寝たら出来てた、基礎？なにそれおいしいの？」

「えつ？」

「えつ？」

「なにそれこわい」

こんな会話があつたら面白

## 第一回 プロフィール公開

主人公

名前

カルマ＝ラクジエンド

性別  
男

系統

特質 <具現化 <操作

容姿

天パではないが、ストレートと呼べる程でもない茶髪に近い黒髪、前髪は目を隠すぐらいの長さ。

顔はこれといった特徴はなく、良くも悪くも中性的、化粧や動作に気をつけていれば美人になる程度には整っている。  
黙つていれば16、7歳程度に見える。  
身長は低め（160強）。

20代で死亡、転生

23歳の時に記憶がもどる

原作開始：29歳

## 念能力

〔落とし神の憂鬱〕（フラグクラシシャー）

- ・特質く操作

## 制約

- ・相手の顔を知る必要がある
- ・相手の念に触れる必要がある
- ・使つて居る間、強制的に「垂れ流し」の状態になり、「落とし神の憂鬱」と「憂鬱な日記」以外の念が使えなくなる

## 内容

- ・相手の自分に対しての友好度、愛情度が数値化されて見える
- ・感情の起伏がある程度操ることができ、あくまでそんな気になれるだけなのでそれ程強くはない

〔憂鬱な日記〕（セーブポイント）

- ・具現化、特質

## 制約

- ・「落とし神の憂鬱」の発動中、相手の名前を具現化したノートに書きこむ必要がある
- ・名前は相手が本名だと思っているものを書く必要がある

## 内容

- ・登録人数はオーラ総量で決まる
- ・名字は書かなくとも使用できるが、その場合相手に「落とし神の憂鬱」による感情操作は出来なくなる
- ・相手の友好度、愛情度に比例してプロフィールができる
- ・相手の現在位置がわかる
- ・相手からの自分に対する一言ができる

## 四話目 親友？ むじり心友

発が使えるようになっていた朝、俺のパソコンには一通のメールが届いていた。

贈り主は昨日のオフ会をドタキャンした少年。

要約すると、昨日来なかつたことの謝罪と後日会つて話をしたいということ、ついでに兄が迷惑かけたということ、何かの達人なんかと尋ねる内容だった。

…さすがの俺も馬鹿じゃないからね、昨日イルミに襲われたばかりで、兄が迷惑かけたなんて言われたら嫌でもわかる。

オタク + ゾルディックの兄がいる=ミルキ・ゾルディックだつてぐらいわかるよ。

でもさ、イルミは十代前半だったんだよ？ 逆算したら初めてネットで知り合つた時、ミルキは六歳前後つてことになる。

一応、一緒にやつてたゲーム、15禁なのにな……まあ、どうせ常時（グロ的な意味で）18禁の世界だしな。

ともかく、今一番重要なのは、少年あらためミルキが会いたいと書いてきてあることだ。

上手くいけば、念能力を使えるかもしね。

此處でミルキ相手の親友フラグを立てておけば、後々（ゲームとかの）情報収集に役立つだろう。

それに、どうせイルミには俺のことがばれてるんだ、開き直るだけ開き直つておこう。

よし、そうと決まれば

「念能力の実験あんまりキルキと心友大作戦」  
ソウルメイト

決行だ！

……ネーミングセンスには深くシッコむなよ。

某日、ザバン市外のとある公園。

「えーっと…白色のベンチ…あ、あつた」

やつとミルキとの待ち合わせ場所についた、時間は…あと15分  
ぐらいはあるだろう。

もう少し遅く来ればよかつたかな？

「はあ～、実質的には3人目の原作キャラか…」

解体屋に暗殺一家の兄弟か、キャラはキャラでももつと（社会的に）まともな奴に遭遇したいね。

それにもしても、原作があ、その前に自分、生きてるかな？

はあ……、そういう今後のことも考えとかないとなあ、個人で動くには金がいるし。

金があ…シビア過ぎるね。

大体、俺はどこぞのオリ主みたく、天空競技場で一儲けとかできないだろ？」なあ……。

……いや待てよ？ 何も選手としてでなくとも、原作で勝った方にそれなりの額を賭ければよくないか？

元手も必要だが、イケる気がするな。

んー、だがその元手をどうしようか。

借金もありだが、危ないグループから借りるととんでもないことになるだろ？

……そうだ！ 凝を使えるようになれば原作のゴン達みたいに値札競売市で掘り出しものを見つけられる！

すごいなー、俺の人生薔薇色じやん。  
さすが俺？

「……あの」

「うはっ！」

「え、あの、ラクジエ、さん、だよね？」

俺が未来に思いを馳せていると、急に誰かが話かけてきた。

そこにいたのは黒髪、黒眼+猫耳にて、ゴホンゴホンふくよかな体つきをした少年だった。

「あ、間違った？ あ、う……」

ちなみに、ラクジヒとは俺のファミコネームである「ラクジヒ」からとったハンドルネームだ。

「間違つてないよ? ミクリ君、だよね?」

ミクリ、は相手のハンドルネームだ。

MILUKI MIKULIなのだろう、簡単なアナグラムだな。

「本気でミルキだよ」

「そう…俺はカルマだよ、よろしくね?」

「…………」

「…………」

「…………」

「…………」

会話が続かない。

なんでこんなに空気が重いんだ?

ミルキはこっちを凝視してくるし、何がしたいんだ?

「…………昨日……」

「は? ん?」

ボソリと、聞こえないほど小さな声でミルキは何かを言った。

「昨日、イルミ兄が……」

ああ、そういうえばそうだった。

暗殺一家と言えども、負い目の一つや二つ感じるんだな。

「イルミ君のひとなら気にしなくていいよ、さすがにじょっと怖かつたけど、ね」

子供に罪悪感をあたえるなんて、可哀相だ。

なんてコト、俺は言わない、今だつて気にするなと言つたが「怖い」という一言は確実に、ミルキ傷口を抉つたはずだ。

きっと、俺はミルキにとっての初めての友達だ。  
ゾルディックの人間にとつて、友達の影響力は未知数だろう。  
だつて、友達がいないんだしさ。

俺も、何年かネット友やつてたけど、ゲームの上達具合とか、子供故の我が儘な性格とか、のめり込み具合とか、ネットですら友達いなさそうな要素があるし。

俺の生れついての、魂に刻まれた日本人氣質がなかつたら友達じやなかつたろうね。

「『』めん……オレ、……初めての友達で……」

ゾルディックと言えども、所詮人の子、ましてや子供って感じ?  
まあ、俺だつて可哀相なんて甘いことは言わないので、子供をい

じめる趣味はないし。

「ほら、気にしないでよ？ 大丈夫だつて、ね？」

「うん……」

「ほら、ハンカチ」

ハンカチを渡した時に、軽く手がふれる。  
凝は出来ないけど、きっと垂れ流しのままの箸のソレに触る。

フラグクラッシャー  
落とし神の憂鬱

「～～～～～！」

目に、何か得体の知れない違和感が襲う。

「え、どうしたの？」

「…、目に、ゴミが入つただけだよ…」

「…そりゃ大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

見える。

ミルキの右胸の辺りには、ピンク色で0、水色で460という数

字が。

だが、まだだ、この能力はこれだけじゃない。

相手に、笑ってほしいと、笑顔になつてほしいと念じてみる。

「そつかあ……」

ミルキが、安心したかのよう、「へにゅう」と笑つた。

「……」

取り敢えずは、成功つて所かな?  
さて、次は。

セーブポイント

憂鬱な日記

鞄から本を取り出す、初めてだつたがすんなり具現化できたな…。

本は…紺色の普通の日記帳みたいな外見だ。

「? なにそれ?」

「ああ、ちょっとまつてくれないかな? 「めんね」

中を開く…。

.....履歴書のような内容だが、好きな食べ物とか、身長体重...座高まで、色々ある。

白いページが3枚、残り全部が灰色、多分白いページしか使えないのだろう。

本についていたペンでミルキ＝ゾルティックと書く。  
名前、性別、現在位置と好きな食べ物嫌いな食べ物、生年月日と  
出身地、がでた。

そして、俺への、一言……。

イルミ兄が認めた強い人、オレの初めての友達！

「……うん」

アレ？ 目から汗が…

「目が痛いの…？」

「いや、大丈夫、……アイスでも奢るよ…」

「え！？ 本当に！？」

…ミルキの頭の上に友情度200JPの文字がでていた。  
本に目をやると…。

アイス奢ってくれる優しい人！！ という文字が。

「……不安だよ…」

激しく、お前の将来が。

ああ、そういえば実の弟にブタ君呼ばわりされたりするんだよね。

「はやくーーー！」

「……はいはい、アイスは逃げないからねー

この後アイスを奢り、ゲームの話を直にして、10程友情度が上がった。

……さらに、何かの達人かとか、強いのかを聞かれ、苦笑いでかえすと嬉々としてゾルティックについてや、殺しについて語られたことも、嫌そうに拷問について聞かされ、80程友情度が上がったことについては細かくは言わないでおこう。

何はどうあれ、それなりに楽しめた上に目的も果たせたんだ、俺としてはそれなりに有意義な時間だったと思えたよ。

## 四話目 親友？ むじり心友（後書き）

ミルキ・ゾルディック

友情度：570

愛情度：0

友情度の基準は

グリードアイランド編のゴンとキルアで

1000前後ぐらい

愛情度の基準は

パークがゴンにベタ惚れの時で

1000前後ぐらい

結構テキトーなので変更するかも知れません

ちなみに、数値はゲームではないので上限はありません  
出るかどうかもわかりませんが、マイナスもあります  
ゼロはそういう意味では無関心、ということです

数値については本当に適当なので、疑問点、アドバイス等があり  
ましたら教えて下さい

## 五話目 マーティアちゃんと出会った日

ミルキと出会った俺はその後、心を入れ替え念の修行と、基礎体力の向上に明け暮れている。

まあ嘘だけど。

ん？俺は毎日ゲームに明け暮れているよ。

理由は簡単、念の修行になるからだ。

今度は嘘ではない、ゲームをやることによって、より俺（主人公）の存在は強大で、絶対的なものだと脳に刻んでいるのだ。

念の修行はある意味、思い込みが一番大切だと俺は思っている。

まあ、それでもある程度の基礎体力は必要だけど。

別に、俺に体力が全くない、というわけではないけどさ。

原作介入は俺にとっては最早決定事項。それなのに一次試験で脱落とか遠慮したいし、どうせならうかりたい。

ま、いざとなつたらキルアみたいに移動用の道具の持ち込みをするだけだけどさ。

……さてと、準備も終わつたし、行くか。

二二一円ばかりと、家を、ザバン市を出る下準備に力を入れてき  
た。

クリアードゲームは全て売り払い、両親からのお小遣ももうつ  
たおかげで、手元には三十万ノ程がある。

そろそろ一ノート生活も飽きてきたし、この念能力の性能をチエッ  
クもしないと駄目だしね。

こんな俺だつて、少しの危機感ぐらにはまつてゐ、筈だ。

ちなみに、多分家には「一度と戻らない」だつ。

まあ、此処まで育ててもうつたせめてもの恩返しに、名前は使わ  
せてもらひよ、ミルキに名乗つちやつたし、戸籍もあるしね。

でもフタミリーネームだけはライセンスを取るまでだ、取つたら  
捨てよ。精神的にじやまなんだよね。

「ホンシ

それでは、この体のおとーさん、おかーさん、今まで育ててくれ  
てありがとうございました。

もう一度と会つことはないでしょ、わよつなりー。

ターゲットは、小綺麗な格好をしたスタイルの良い、金色の髪に、遠目でもわかる程に整った顔をもつた女。

最近、俺は此所でアルバイトをしながら、来るかどうかもわからぬチャンスを見計らっていた。

そして、そのチャンスはついに来た。

ザバン市から離れた、治安が良いとは言えないとある町。ここは、訳ありで突然現れて、突然消える奴から前科持ち、足を洗つたが表に立てないような奴に地方マフィアや非行少年グループ、そんな危ないコトで溢れかえっている。

事前に道ですれ違い、偶然を装い肩をぶつけ「落とし神の憂鬱」を発動させておいた。

そして今、そのターゲットが絡まれている。  
絡んでいるのは此処一帯の元締めの部下、だからみんな見て見ぬフリ。

女もそのことはわかつて居ようが、派手な抵抗もなく路地裏につれて行かれた。

「おー、キレヒーな顔してんなあ

「だな、久しづりにかなりの上玉だ」

「……」

「おいおい、怯えさせんじゃねーよって

「それがイイんじゃねーか

「だよなー」

「……」

女は腕に自信があつたのだろう、敵が増えようと、4人程の男に囲まれながら、怯えることなく平然とした無表情だった。

……俺なんかでも強いつて、わかるのに、ああいう風に絡む馬鹿つてよく今まで生きてこれたな。

男達がにじり寄り、女が構えをとひつとした瞬間。

ガアツダアーンー！

ごみ箱を思いつ切り蹴る、まあ中が満杯だから倒れただけだけど。かなり大きな音がでた。

試合開始の合図、なんてね？

「一 誰だー！」

その声に、俺は颶爽と……ではなく、少しひぐびくしながら、男達にむかって行く。

今回のハセプロはやるとさせやるへタレ男だ。

「ハ、いつ女って、自分より強い男しか好きにならない！ みたいに」と言つけど、実際自分がいなきゃ 何も出来ないけど時々男前ぐらこのやつにハロヲといふんだよな……ゲームだと。

「……つかー 正義のヒーロー気取りか？ 残念だつだけぶつつー！」

女が一番近くにいた、多分リーダーであるハ男の鳩尾にグーパンチ。

俺は手下Bにフルボッコをねてる。

「おーい！ ハフ、調子のんなやクソアまばぶりーー！」

女が近づいてきた手下Cにロークリック、体勢を崩した手下Cに容赦なくトドメの一撃。

俺は手下B（フンフン頬い）にフルボッコされてる。

「へ、うわあっー！」

女、逃げようとした手下Aを横に蹴り飛ばす、膝をついたところで下顎を蹴り上げた。

俺は手下B（ニヤニヤ笑つてた、死ねよ）に最後の一撃をくらわされ、フルボッコ完了、手下Bは逃げようとして女に瞬殺された、ザマア。

「おい！ 大丈夫か！？」

さてと、本格的に攻略スタートか。  
少しどキドキするな。

友情度20、愛情度6

「へつ？ あ、はい…」

なるべく怯えているように、何がおこったか解っていないようこの返事をする。

無防備に突っ込むなんて無謀、なんて言われるだろうなあ。

俺が小首をかしげながら返事をして、の方へ振り向いた瞬間。

「……え？」

「そんなにも可愛いらしいのに、私を助けるためだけに彼奴等にむかって行つたのか！？ なんて健氣で可愛いいんだ！！」

「えー……」

いやいやいや、大丈夫だよ、多分この人は別に年下趣味とかじゃないから、可愛い（あ、自分で言つちやつた…）ものが好きなんだだから、第一、俺童顔だけど一応高校生ぐらいには見える筈だから。

「くつ、しかし私は決して年下しかダメという訳では……いや、この子だって成人はしている筈…いやしかし未成年だと言つ場合も……」

ヤバい、リアルな まにあ さんだ。

現実つて、時々難易度ものすごく低くなるよね。

あ、この場合は ただし年下に限ります かな？

まあ、まにあ さんだとわかれば話は早い、ヘタレから庇護欲を掻き立てられる子にチョンジだ。

「あ、……お姉ちゃん強いんだね……」

幸いなことに、今世の容姿ならば多少子供っぽい口調でも違和感はほとんどない。

……中人の年齢が40過ぎとかは考えるなよ。

「（くつ、お姉ちゃんだとつー？）……私は大丈夫だ！　そんなことより、名前はなん……怪我はしてないか？」

愛情度60UP

「……僕はカルマって言い、ます……、怪我はちょっとだけ……でも、なれてるから大丈夫です！」

全然なれてないけどね、普通に痛いよ。

「（なれている、か……）カルマか、私のことはベルと読んでくれ、それに敬語は無しでいい……、そんなことより、何故こんな所にいたんだ？　ここらは無法地帯だ、子供がいていい場所じゃない……」

愛情度30UP

……本当に童顔に産んでくれた両親に感謝だよ。

上がり具合がやばい、可愛い同級生の女子に消しゴム拾つて貰つた男子以上だ。

「僕、子供じゃない、よー！　お母さんも、お父さんも、お兄ちゃんも、皆いなくても、一人でも大丈夫なんだ！」

あ、ちなみに俺、前世も今世も一人っ子。

前世では妹みたいな幼なじみはいたけど、俺死んだし、関係ない

か。

「……自分を子供だと認められない奴は、まだまだ子供なんだよ」

そう言つて、ベルは俺を　だき　しめた。  
位置的に……胸が……俺の顔に……。

「カルマ、私と一緒に来ないか？　一人は……寂しいだろう？」

…全く関係ない話だけど。

この町には非行少年グループがある、それに、なんでもそのグループは自分達を育ててくれた孤児院に、稼ぎの大半をまわしているらしい。

孤児院には、30人近い子供達がいて、一月に一人は増えて、一月に一人はどこかに消えるらしい。

なんでも、まにあ　の人に小さな可愛い子供は、多少汚らしくとも良く売れるらしい。

……非行少年グループのリーダーは、一月に一回ぐらい、黒服の男から泣きながら金を貰っているらしい。

皆、成人もしてない所か、売られるのは10歳にもならないガキらしい。

「僕、子供じゃない……でも、寂しいよお……」

「やうか……

「……僕なんかが、一緒にいていいの?」

「ああ、もちろんだ」

そう言って、ベルは俺と手を繋いで、今だに男達が倒れている薄汚い路地裏をぐる。

……別に、咎める気はないし、強いて言つならただの戯言だけど、ベルは偽善者だね。

ま、なんかの漫画でもやらない善よりやる偽善、なんてあったし、俺的には悪くはないんだけどさ。

じつ、一応キチンとしたモラルを持っていた元日本人としては、目の前でやらると、まあ、ほら、胸のあたりが何かじゅ、モヤモヤするんだよね。

ましてやここってBad Endが溢れてる世界だし……あ、ヤバい、ぐじけやう。

……俺には関係ない、うん。

どつかの誰かがルートを間違えてBad Endにならうが、関係ない、てこうか、むしろメシウマだし……。

大体、 そ<sup>う</sup>なる設<sup>て</sup>定だつたんだよ、 僕の物語の輝きを引き立て  
くれる影つて、 い<sup>う</sup>やつ?

俺の物語に、 一瞬でも出れたんだから、 感謝してほ<sup>しい</sup>ぐら<sup>い</sup>だ  
よ……。

「……ど<sup>う</sup>した? やつぱり、 どこか痛いのか?」

「……うん、 少しだけ、 でも、 大丈夫だから」

「……そ<sup>う</sup>か……」

ベルの、 僕の手を握る力が、 少しだけ強くなつた。

……痛くて、 少しだけ泣きそうになつた。

## 五番目 マーティを出ていた日（後書き）

ベル

友情度：20

愛情度：716

出来るだけ原作キャラに負けないぐらい濃いオリキャラをつくりうとしたら、変な口調のショタコンになってしましました何を血迷ったのか最後は少しシリアス気味に書いてみたり

これからもこんな感じで、勢いにまかせてやりたい放題やっていくつもりです

## 六話目 神様、俺はあなたが嫌いです

ベルの家に行くのには、それなりの時間がかかった。

その間、ベルがハンターライセンスを持つていることがわかり、移動中に愛情度、友情度ともにいくらかの上昇があつたりましたが、俺の正体（二十過ぎの一ート）はばれなかつた。

いくら俺が一般人でも、いや、一般人だからこそ、俺の嘘なんてネットで調べられればすぐにバレる、と思ったが杞憂に終わつた。

が、そのかわりに、それ以上の問題があつた。

本気<sup>マジ</sup>でこんな偶然有り得ないよ。

例えるならパンをくわえて遅刻間際に走つて登校してたら美少女とぶつかって、美少女のパンツが見えるハプニングが起きて、その美少女に罵倒された後学校に行つたら美少女は実は転校生でしたってベタベタの展開が現実に起こるくらい有り得ない、そんな問題があつた。

「流星街……？」

「ああ、流星街だ、聞いたことぐらいはあるだろう？　私はそこで育つたんだ」

本当、こんなの有り得ない。

「…………うん…………」

「……カルマが、嫌だと思うのならば、私は無理には連れていきたくはない、あんな所に好き好んで行く奴なんていないからな……」

愛情度600DW、友情度500DW

……ツチ。

まあ、流星街に属せば迂闊に手はだせないだろ……悪いことばかりでもない筈。

「……嫌じゃ、ないよ、僕も流星街に行く

「ほ、本当か？　いいのか？」

「うん、だつてベルの育つた街でしょ？　なら、平氣

愛情度500UP、友情度520UP

「そ、うか……滞在期間はかなり短い、それに、安全だけは確保する、だから安心してほしい」

安心なんかできないだろ、てか、本当に頭大丈夫かコイツ？  
安全が欲しいのなら、危険に飛び込めなんて洗脳でもされてるんじゃないのかな？

確かに、流星街の住人なら、幻影旅団に殺されることもなくなるだろうし、報復を恐れて手だしもされないだろ？。

有り難いけど、今までの、カルマ＝ラクジョンドの人生が全て否定され、なかつたことにされる。

戸籍だつてなくなるから、動きやすくなるだらつ。

前途多難だな。

「ならば、流星街に滞在する間、守るべき」とを言つておくれ

いきなりかよ…

「うん」

「その一、盗みはいいが喝上げはなしだ、その二、殺生沙汰は勿論本氣の喧嘩はするな、その三、大切な人をつくるな、以上だ」

…？ その一、その二はまあ置いておくとするが、その三はなんだ？

駄目元で聞いてみるか…

「大切な人をつくるなつて、何で？」

「……そいつに何かあつたら、駆り出されるからな……」

ああ、そういうことね。

報復するために自殺、とか自爆なんて確かに嫌だな、まだベルに常識的なところがあつてよかつたよ。

でも流石に、強制ではないだろうから大丈夫だろ、多分。

「？ でも、ベルは僕にとつての大切な人だよ？」

愛情度30UP

「そうか……ありがとう」

若干泣きそうな顔で、俺の頭を撫でる。

……そういえば、ベルの歳っていくつだったんだろう？  
俺よりは若い……のか？

十代後半～二十代前半ってことはわかるけど……。

つて、シリアスな場面で何考えてんだ俺。

「……改めて、名乗ろうカルマ、私はミラベル＝ルシルフル、ベル  
と呼んでくれ

……。

天罰ですか神様。

それとも、俺のことが実は嫌いなんですか……？



七話目 プロハンター（笑）（前書き）

青 水色に訂正しました

## 七話目 プロハンター（笑）

あの衝撃の本名暴露から暫く。

念能力をフルに使い少しづつ、遠回しに聞いたところ、「うやうやしくロロとは流星街に捨てられた時に知り合つたらしく、血も繋がつていな」。

そもそも蜘蛛の団長ってことすらわかつていなやうだった。

…が、旅団メンバーとはメールを週に一、三度程度は送りあう仲らしい。

ベルのストライクゾーンからは外れているものの、これなんて恋愛フラグ？

幼なじみ的な所から始まって、好みのタイプじゃないのに何で私こんなにドキドキしてるんだろ…？ 的なテンプレですよねわかります。

それともあれか、クロロじゃないなら、フロイタンか？

ビニーズの夢主だよ。

あ、ちなみに夢小説なるものは前世でかなり読んでもました。

…ってそんなこと考えてる場合じゃない。

流星街に行き、戸籍の抹消がすんだあと、俺はベルと孤児院？にいくこととなつた。

ちなみに一応、ベル個人のものだそうだ。

ベル個人のと聞いて男所帯、というか美少年の集まりかと思つていたが、どうでもなかつた。少女もいたし、今のところ確認できる限りでは、年齢層はそれ程低くない。

…が、何でだろう、嫌な予感がする。  
ピン、と張り詰める空氣、だと、物凄く緊張するものがある。

そんな俺の予感は外れていなかつた、薪を取りに行つた一人の少年が、丸太を肩にのせて帰つてきたのだ。

下手をすれば十数キロはあるものを、軽々と、だ。

ベルに聞いてみると、どうやらここにいる男女、合わせて二十数名程の内、十数名が劣化ゴン状態らしい。

さりに言つと戸籍がないものは俺含め僅か三名のみ。

疑問に思いまたベルに聞いてみた。

すると、どうやらベルから見て、ハンター試験に受かりそうなヤツのみ戸籍がないらしい。

…あれ？

なら、何で俺戸籍抹消されたんだ？

俺は明らかに激弱で軟弱な一般人なのに……。  
そう思い、またベルに聞いてみる。

「ん？　ああ、カルマは強くなれそうだったからだな」

いやいや、俺みたいな一般人がそんな強くなれるもんなのか？  
疑問に思い、また訪ねることにした。

「ああ、私は武道の心得を持つたプロのハンターだからな、田を見ればわかる」

プロハンター（笑）

念も使えないのに……とは言わない。

つまり、俺は何の確証もなく強くなると思われ戸籍を消されたのか。  
ふざけんなと思うがまいい、今の所は保留だ。

何の確証も無いとは言え、俺は念が使えるのだ。  
これから念の修行でもして強くなればいい。

……そういえば、ベルはなんで念を教わらないんだ？  
数年前にライセンスを受け取つたらしいが……謎だ。  
……まあ、体術だけでかなり厄介なんだ、そのままでいてくれ。

「カルマ、皆集まつた、自己紹介をしてくれ

……ああ、そうだった。

今は孤児院のなかにある多目的ホールのような場所にいる。  
これから歓迎会的なことをするらしい。

そのために、薪を集めたり買い物に行つたりしていた奴らを待つ  
ていたのだ。

「……」

ホールには子供達が全員、つまり二十数名程が集まっている。

……何と言うか、俺、美人への耐性はついてなんだけど。  
数には勝てない。

物凄く、ものつすゞく緊張する。

「……カルマです……よ、ヨロシクネ……」

拳動不審？ 自覚済みだよ。

それでもまあ、暫くはお世話をうつと想つので、笑顔で挨拶ぐら  
いはしておぐ。

……引き攣つるとと思つけど。

「カルマ兄ちゃんねー！ ヨロシク！」

「……ヨロシクね！」

「よろしく、です……」

「カルマ兄ね！ ヨロシク！！」

一瞬、間があいてから。

二口二口笑つた元気な男の子が返事をすると、皆も騒ぎだす。大体は皆、友好的に挨拶してくれるんだけど

…一人だけ、少し離れてこっちを見てる。

多分、戸籍のない…ハンター試験に受かる程度の実力を持つた奴らだろう。

一人は黒目黒髪のツインテールのゴスロリの十六歳ぐらいの女子で、もう一人は銀髪赤目に黒コートの、少年…？ とにかく、十代前後の男だった。

「……王子様（ポシリ）」

…うーん、女の子の方は恋愛フラグいそ、かな？ なんか見た目的に、恋愛確定のヤンデレルートっぽいな…攻略の時は注意しどかないとね…。

……で、ついでに。

「……」

男の方、つーかもうじりせなら中一君でいいや。  
中一君は何故か知らんが俺を睨んできている。  
そりゃあもう、親の敵を見るような目で。

「……」

とつあえず、ニコッと笑いかけてみる。  
相変わらず引き攣つている気がするが、もつ開き直り。

「つ！……ツチ……」

中一君は舌打ちをした挙げ句、何処かへ行つてしましました、め  
でたしめでたし。  
めでたくないけど。

はあ……俺に勘違い属性はなかつたはずなのになあ……。

「王子様……」

「は？」

王子様、なんて柄でもないことを俺の服の端を掴みながら言つて  
くれたのは先程俺がガン見していたゴスロリ少女。  
皆笑顔でこちらを見ているなか、そのまま少女は俺の手をとつ。

「傳いて……私に……」

そう呟いて、手にしたままの俺の手にゅつくつと匂を……。

ゾクリ。

一瞬のうちに、体じゅうに鳥肌が立ち、背中に冷や汗が浮かぶ。それと同時に、俺は少女から俺の出来る最大級の速さで距離をとる。

「……王子様、何で？」

可愛らしく、首を傾げてこちらの王子、またヒヤリとした汗が背中をつたつた。

何で、なんてわかりきってる。

念だ。

多分、操作系。

傳けなんて言つてるんだ、奴隸にでもされるんじゃないかな？いや、王子様（笑）か？

「カルマ兄ちゃん、マイラがどうかしたの？」

いきなり飛びのいた俺に、近くにいた男の子が声をかける。

「私は何もしてないわ」

マイラ、とはこのゴスロリ少女の名前だらう。何もないわけ無いだらう、一瞬氣絶しそうになるぐらい怖かつたぞ。

「じゃあ、ルーシィ兄ちゃん？」

男の子が指をさす、その先には壁に張り付いて俺達、正確に言つと俺を睨んでいる中一君がいた。

あいつがルーシィとか……ふつ……女らしい名前だなあ……。

「……ルシフェルは何もしていない

……うわあ。

原作キャララと名前かぶつてる上に中一だ……俺の名前以上の中一だ……同情してあげよつ……。

「カ、カルマ兄ちゃん…？ 何で泣いてるの…？」

それはね、心が痛いからだよ名もなき男の子。

普通の名前が羨ましいなあ……いつそ半蔵でも羨ましいよ。

「あー！ マイちゃんとレー君カルマお兄ちゃん泣かしたー！！」

「え！？ 僕は何もしてないよー！」

「私も……」

「レベッジヒマイラの嘘つき～

「私は嘘などついていない

名もなき男の子の名前はレベッジって書つのだ。  
まともな名前つていこなあ。本当に。たしかに。

「静かに……」

その声に一斉にヒュタ、つと静かになった。

……耳が痛い、鼓膜が破れそうな大声をあげたのはベルだ。

「静かになつたな……よし、順番に並んでくれ」

並べと言われた子供達は、打合わせでもしていたよう、「ん」と、多分だが年齢が若い順に並んでいく。

最終的には俺の目の前で、縦に一列になった。

「えっと……、ゴーザです、年は10、ワロシクねー。」

……“ひきめい”今度はあからから面白紹介してくれるらしい。“ゴーザ”と名乗った少年は手を差し出す、握手をしようと囁く意味だらけ……。

「ワロシクねー？」

「落とし神の憂鬱」を発動させる。

じつは暫く此処でお世話になるんだ、全員に発動しておいた。

「ナシマフ、10歳、これからよひごくへお願ひします……」

「…………よろしく…………」

「…………よろしく…………」  
俺から握手をしたり、手の骨を折られたり散々な目にあつた……。

「…………王子様…………私、マイラって言つて…………歳は一七…………末永くよろしくお願ひします…………」

「ああ、まだマイラと申す君が残つてたんだ……。」

「へ、うそ…………よろしくね…………はは…………」

じつせり、俺はさつきのことが軽くマイラウマを乗つてしまつたらいい。

ふふふ……俺はこのマイラウマを乗り越えて攻略してやる……。

「う…………」

ちくしょく、握手をしただけなのに全身に疲労感が…………。

俺がレベルアップしないと攻略できないタイプのキャラ位置か…。

「ツチ……ルシフェルだ……」

「は？」

え、あ、いたんだ中二君。

忘れてた……中二のくせに不憫キヤラか、ドンマイ。

「俺の名前はルシフェルだつて言つてんだよー……一回で聞け！」

「ルシフェル君ね……ヨロシク……」

一応手を出してみる。

ルシフェルは少しの間俺の手をジロジロと見た後、決して友好的とは言えないものの握手をしてくれた。

そして俺が「落とし神の憂鬱」を発動させた瞬間。

俺は急激な疲労感に見舞われた。

手に力がはいらなくなつた。  
足が震えた。

激しいめまいに襲われる。

そのまま、倒れて氣を失つてしまつた俺の最後の光景は。

目の前にいた人物の胸の位置にある水色の15という数字だった。

## 七話目 プロハンター（笑）（後書き）

オリキャラのルシフェル、別名中二君  
名前はミラベルからもらつた設定で、ルシルフルからきてます  
マイラとルシフェルは原作始まつてもちょくちょく出していきた  
いキャラです

そのうち、この二人の生い立ちを番外編で書くつもりです  
例え需要がなくとも、書くつもりです

## 八話目 クライインレビン症候群

目を開けると、見知らぬ美少年＆美少女数名に顔を覗かれていました。

えーっと、これどうこいつ状況…？

「カルマ兄ちゃん…！」

「ぐふつ…？」

いきなり知らない女の子に、腹にタックルをされた。  
意識が飛びそうだ…！

「ベル姉！ カルマ兄が起きたよ…！」

ベル……ああ、そういうえば、孤児院に来てたんだつけ？  
んで、殆どビックリ人間のガキに自己紹介して…。  
あれ？ どうなったんだっけ？

「カルマ！ 大丈夫か…？」

「あ、えつと…大丈夫だよ」

「本当にか…？ 意識はしつかりしているのか…？ 体は怠くな  
いか…？ お腹空いてないか…？」

「…大丈夫、だよ」

「本ひつ並にかー?」

……うぜえ。

少し腹が空いているがそれ程でもないし、多少の倦怠感はあるが徹夜明けにくらべればなんてことはない程度だ。

「うん……それより、僕どれぐら一寝……倒れてたの?」

「六日だー!」

……はい?

「えつ……ぱーどりうん?」

「? ねえラア兄ちやんー、ぱーどりうんってなーにー」

「こら、俺達はあつちこつてるが……」

「はーい」

見知らぬ美少年と美少年達は別の部屋へと行ってしまった。

……真っ黒の服を来た美少女、確か、マイラだけはこちらをずっと見ている。

「…………めん、もつー回聞くけど、僕、どれぐら一寝てたって?」

?

「六日だ」

ええー……。

六日も?.

「……マジで?」

「マジでだ」

「……」

何でだ……?

俺は確か、自己紹介してただけだ……最後は中一君で「落とし神の憂鬱」を……。

あれ? 「落とし神の憂鬱」って念能力だし……もしかしてオーラ切れ?

うーわー、下手したら俺死んでたかもしれないの?  
だってあれ、生命エネルギー? でしょ?  
あつぶねー……。

「…本当に大丈夫か?」

「え、あ、うん、普通に大丈夫」

「……そつか……いきなり倒れたからな……起きても意識は混濁したまま、また1時間もしない内にまた寝てしまつし……貧血にしては長い間寝ていたし……」

ヤバい。

此處には念能力者<sup>マイラ</sup>がいる……。

念能力者だつてバレたら……特に何となるわけではないが、手の内がバレるのは遠慮しておきたいな。

適当に、何かそれっぽいことを言つてごまかしとこひ。  
大丈夫、今まで病弱系ヒロインの攻略は何回もした……その中から、適当になにかを言えば……。

「……黙つてて、ごめん

えつと……あの町にいた時に、親切なお兄さんに聞いたんだけどね  
眠り姫病、って言うらしいんだ、これ  
発病の原因はわかんないって……

発病者の中には、六ヶ月ぐらい寝たり、起きても三日も起きて  
られない人もいるんだ  
僕はスッゴく軽い方だから、そうでもないんだけど……」

うん、アドリブにしてはいいんじゃないかな?  
所々、穴があいてるけど、大丈夫だろつ……。

「眠り姫……お姫様かあ……ふふふふ……」

……今のマイラの発言は、この際聞かなつたことにしておこひ。

「……そつか……眠り姫病、か……わかつた、暫くは安静にしててくれ、決して無理はするなよ」

「うん……ごめんね」

おっしゃあ！ 信じた！

取り敢えず、心の中でガツツポーズをしておいた。

「謝るな……こちらこそ、すまなかつたな……」

いや、謝ることは日本人の証しですから。  
つて、何でそっちまで謝つてんのさ……。

「……何でベルが謝るの？」

「……普通の生活、せめて、表向きの病院、それすら、行けなく  
してしまつた……すまない」

ああ、戸籍がないことね。

別に、ライセンス取つたらいいだけだし。  
つか、普通の病院つて……嘘なのに。  
大体、こう言うのつて金さえあれば裏の方が治せるもんだろ。

「気にしてないよ……むしろ、此処に連れて来てくれて、感謝し  
てる」

「だが……」

「ベル、ありがと……」

一コつと、引き攣つていらない笑顔を向けると、ベルは赤面して床  
を見つめる。

相変わらず、愛情度の上がり方がハンパない。

……でも、俺だけなのだろうか？

もしかしたら、この孤児院にいる少年達全員に、この好意を向けているのではないだろうか？

もし、自分が相手に100好かれても、別に1000好きな人がいるなら意味がない。

一番、三番じゃ意味なんてない、一番じゃないと。

「…ごめん、ずっと部屋にいたから…ちょっと、外で太陽にあたつてくるね」

「えっ！　ああ、わ、わかつた！」

今だ赤面したままのベルをおいて、部屋をでる。マイラもついて来ようとしていたが、一人つきりになりたいんだ…と言い、フツと物憂い気味に笑つてやると、一人で笑いながら自分の部屋へ行つてしまつた。

「さて、と」

孤児院の裏にある山の、少し奥のほう。  
そこには綺麗な湖があった。

「念能力についてもつとしつかり考へないとなあ……」

「ういえば、水見式さえしたことがないんだ。  
……いや、正確に言つと、出来ない。」

俺が出来るのは、纏と、死に面した瞬間のみ使えた練？ っぽい  
モノと、ギャルゲ仕様の発のみ。

試しに、水見式をしようと練をしてみよつとするが、全く出来ない、意味がわからぬ。

それに加え、俺は絶すら出来ないし。  
もちろん、応用なんてもつてのほか。

まあ、当たり前だとは思つんだけどな。

「少しひりいは、戦闘も出来ないとヤバいかな……？」

むしろ、半端に実力をつけた方が危ないか？

いや、自分の身を守れる程度には力をつけておきたい。

「……そもそも、具現化したものが戦闘に使えないとか、俺オワ  
タつてね」

「憂鬱な日記」を発動してみる。  
とりあえず、時間をかけて調べてみよつ……。

1時間程たつた

今回使えるか使えないかはおいておいて、色々との「憂鬱な日記」についてわかつた。

まず、手をはなしても、すぐに消えるわけではないと言つこと。  
「落とし神の憂鬱」を発動しないと紙は少し灰色がかかり、書き込めなくなる」と。

新しく正しい情報を書き込めば、そのまま残るが、間違った情報を書けば正しい情報が一つ消えてしまうこと。

重さは感じないが、三・四キロ、下手すると十キロ程度はあること。

破損してしまっても、もう一度具現化すれば直つてること。

一度に二つ以上具現化しようとする、一つ以外全てただのメモ帳が出てきて、これが意外と疲れてしまうこと。

メモ帳の方は自由に表紙の柄が変えられること。

… いんなん感じなんだが…。

… 何なんだ、特に最後の。

俺はメモ帳屋さん（笑）にでもなればいいのか？

「……ほんと、戦闘向きじゃないよな～」

戦うつてあれか、辞書みたいに分厚い本でも具現化して、本の角で思いつきり叩く的なことしか出来ないじゃんか。

何て考えながら、そこいら辺にはてる木に、本の角を叩きつけてみた。

「ゴシ、といつ音をたてて、木には本の角の形にあつたくぼみができた。

おー、これ俺結構イケンじゃね？

生身の人間の骨ぐらいなら折れそうだな。

…念能力者はこれを素手で出来るんだるつけど。

「はあー……そろそろ帰るか、疲れたし」

序盤、調子にのつて凝つた刺繡の表紙の高価そうなメモ帳をいくつか出したせいか、かなり疲れた。

あ、もちろんそのメモ帳は持ち帰るぞ、綺麗だし……。

……五、六冊あるけど。

「明日から修行パート突入かあ……やだなあ」

でもまあ、せめてメモ帳屋さんとして生計をたてられるぐらいには強くなろう。

ん？ 主題かわってないかって？

大丈夫、一冊の本から始まる恋があるんだ。  
一冊のメモ帳から始まる恋だってあってもいいはずだ、きっと。

## 八話目 クラインレビン症候群（後書き）

長期間眠り続ける「病気」、「眠り姫病」と「クラインレビン症候群」一応実際にあります

解説とかは適當です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6097x/>

---

ギャルゲ好きの何が悪い

2011年11月27日18時52分発行